

---

# 南中学2年B組恋愛事情

宮迫 和音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

南中学2年B組恋愛事情

### 【Nコード】

N8824U

### 【作者名】

宮迫 和音

### 【あらすじ】

中学生の恋愛事情。

2年B組生徒32名の恋模様を毎回主人公を変えて書いていきます。

出席番号8番 岡田瑞穂

大好きな高峰君の後ろ姿が見えるこの席が好き。

出席番号22番 野島恒之

岡田瑞穂は俺の好きな女子。

でも、あいつはいつも高峰を見てる事、俺は知ってる。

など。それぞれの恋愛事情です。

\*この物語はすべて作者の妄想であり、フィクションです。  
実在する個人名、団体名、地域名とは何ら関係ございません。



3	3	3	2	2
2	1	0	9	8
山中	山田	森永	村瀬	松本
	<small>ヤマナカエマ</small>	<small>ヤマダニカ</small>	<small>モリナガマモル</small>	<small>ムラセタイチ</small>
笑真	仁架	守	太一	恋乃
				<small>マツモトレノ</small>

?窓際前から3番目。私の席は特等席。  
斜め前が私の好きな人、高峰君だから。

?私は好きな人の隣の席より、斜め後ろの席がいい。  
後ろ姿を見つめることが出来るから。

好きになった時なんてもうおぼえていないけれど、普段とは変わって真面目に授業を受ける横顔とか、野球部だからいつも坊主頭とか、色々見ていくうちに好きになっていた。

?でも、この気持ちは誰にも言えないと思う。  
告白なんて私みたいな大人しい人には大抵無理。噂になったりするのも怖い。

それに私は小学生の時に学んだ。  
恋する心は表に出したら大概傷付く。

だから私は、後ろ姿を見つめる。好きを温めて大きくする。

もし好きを温め続けて大きくなりすぎてしまったら、言うてしま  
うかもしれない。

「お・・・だ・・・お・・・か・・・岡田!!」

目の前に高峰君。教室はさっきとは違いざわざわしている。

「あ、気がついた!!岡田寝てたからプリント預かってたよ。は

い。」

プリントを受け取る。

「ありがとう。」

いつもなら普通のプリントなのに、今日のは特別。高峰君から渡されたから。プリントに触れている手が熱い。

プリントを見つめている私を見て高峰君は

「岡田っておもしれー奴！」

といってプツと吹き出した。

その仕草が可愛くて、言うてはいけないことを言いそうになる。

「あの、高峰君っ・・・！」

「何？」

そう言うてまっすぐ私を見る高峰君をみると我に返った。

言うてはいけない。

「なんでも無い。ごめんね。」

「そっか。あまり授業中寝るなよー」

そう言うて男子の輪の中へ入っていった。

私はそれを見つめながら思う。

好き。

でも、言えない。絶対。

だから私は見つめる。  
明日も、明後日も・・・

出席番号22番 野島恒之

岡田瑞穂。

俺の隣の席の女子。そして、俺の好きな女子でもある。

でも、彼女の視線の先にはいつも高峰和樹がいる事を俺は知っている。

大人しくて少し天然な彼女を好きになったのは半年前。去年も同じクラスで、隣の席だった時に初めて話した時がきっかけだと思う。

俺が岡田が落とした消しゴムをひろって、渡した時、岡田は、優しい笑顔みせて言った。

『野島君って、怖そうな人だと思っていたんだけど本当は優しいんだね。ありがとう。』

女子の笑顔は、裏にいつも何か見え隠れしていてあまり好きではないのだが、あの時の岡田の笑顔は何も混じりっ気のない純粹な笑顔だった。

でも、岡田が俺にだけ笑顔を見せたのはあの時だけ。元々あまり男子と話さない性格のようで、ほとんど喋ることもなかった。

「授業だりー！。早く終わんねえかな。」

後ろの席の長岡がそうばやきながら、俺の背中をボールペンでつつく。

「やめるよ。それ、地味に痛いんだぞ。」

そう言っただけ軽く振り払うのと、岡田のペンケースが地面に落ちるのはほぼ同時だったと思う。

恐らく、岡田の肘が当たったのだろう。

開けっ放しのペンケースの中からバラバラと音を立ててペンが辺り

に散らばった。

一瞬、皆が一斉に岡田を見た。

岡田は顔を赤くして、すみませんと小さい声で言い、椅子から立ち上がる。

俺も拾おうと思って椅子を引いた瞬間に長岡が後ろで騒いだ。

「おつ、和樹君ー、優男だねえー。」

俺が行くより先に高峰がもうすでに岡田のペンケースの中身を拾っていたのだ。

俺も拾ってやろうと思ったのに、何故か体が椅子に貼り付けられたように動かなかった。

ようやくペンケースの中身を拾い終わって岡田は言った。

「ありがとう。」

すごく小さい声でしかも、周りは高峰を冷やかしたりしてる声で溢れていたが、俺にははつきりその声が聞こえた。

それに、あの時と同じ純粹な笑顔だった。

俺が高峰より先にペンケースの中身を拾っていたら、岡田はあの笑顔を俺にくれただろうか。

どうしてあの時、俺は動くことができなかったのだろうか。

分かる事は、岡田は俺なんか見ていないってこと。

岡田の心に俺の立ち入る隙は無いこと。

今もまた、岡田の視線の先は高峰。



出席番号22番 野島恒之(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

本当は切ない系にしたかったんです…。これ。

アドバイス、評価いただけたら嬉しいです

ここまでありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8824u/>

---

南中学2年B組恋愛事情

2011年10月8日19時10分発行